

第104回日本精神神経学会総会

シンポジウム

## 双極スペクトラム障害の遺伝研究

川 嵯 弘 詔 (九州大学大学院医学研究院精神病態医学)

近年における双極性障害の疫学、精神病理、薬物療法における研究成果の進歩によって、本障害は従来考えられてきたよりも幅の広い症候を持つ疾患群と考えられるようになった。中核群である双極性障害I型の有病率は、約1%と統合失調症と同様であるとの報告がなされ、加えて精神科病棟における急性期の入院については、躁病および臨床的にそれらよりも軽症な双極性障害 (soft bipolar spectrum) の外来患者の増加が認められるといわれている。これらの患者群はDSM-IVによると双極性障害II型と診断されるが、その有病率は中核群である双極性障害I型より、4倍から5倍以上の頻度であるとの報告がある。双極性障害II型は種々の症候、サブタイプ、治療やその結果の多様性を示すことから、双極スペクトラムという概念で捉えていく方向性が米国を中心とし、1990年代頃より提唱され始めている。DSM-III

の時代から統合失調症は、社会的な機能の低下した精神病 (psychosis) 圏内の患者群を中核群として診断カテゴリーの幅が狭くなっていると同時に、気分障害の概念が拡大し始めたといえよう。また、疫学的研究および遺伝学的研究においては、近年統合失調症と、双極性障害を含む気分障害についての境界線が、研究成果の蓄積につれて徐々に曖昧になりつつある。神経科学や遺伝学などの生物学的精神医学の知見の進歩に基づき2011年に刊行予定のDSM-Vにおいては、精神病圏および気分障害圏の診断カテゴリーや診断についての概念が大幅に変化することが予想されている。本シンポジウムにおいては、これまでの双極スペクトラム障害の遺伝学研究について概括し、現在の問題点、今後の展望について述べたいと思う。

(この論文は抄録集より転載しました)